

聖書：マタイ 26：57～68

説教題：神の子キリストなのか

日時：2020年8月16日（朝拝）

イエス様は前回の箇所、ついに敵の手に渡されました。最後の晩餐を経て、夜にゲッセマネの園で祈っていた時、裏切り者のユダを先頭にした大勢の群衆がやって来てイエス様を暗闇の中で逮捕しました。そしてどこへ連れて行ったのでしょうか。それは大祭司カヤパのところでした。もともとこの陰謀はカヤパをトップとするユダヤ人のリーダーたちによって仕組まれたものでした。26章3～4節：「そのころ、祭司長たちや民の長老たちはカヤパという大祭司の邸宅に集まり、イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。」そしてユダがイエス様を売り渡すために相談に行ったのも祭司長たちのところでした。また前回イエス様を捕らえるために剣や棒を手にしてやって来た大勢の群衆も、祭司長や民の長老たちから差し向けられた人々でした。ですから彼らがイエス様をカヤパのところへ連れて行ったのも当然でした。すると夜中なのに、そこには律法学者や長老たちが集まっていました。そこで最高法院の集まりが開かれます。正式な議会は夜が明けてから27章1～2節で開催されますが、実質的な裁判はこの時に行われたのでしょう。その大祭司の家の中庭までペテロもついて行ったと58節に記されます。その彼がそこでどんな振る舞いをするかは次回69節以降で見ることになります。

さて、この最高法院の集まりは「イエスを死刑にするため」のものであったと59節にあります。ですからこれは正しい意味での裁判ではなく、初めから結論ありきのものでした。当時、人を死刑にすることは世界の覇者ローマにしかできないことでした。ですからイエス様を死刑にするには2段階の手続きが必要でした。まずはユダヤの法律の観点からイエス様をさばかなければなりません。イエスを死刑にすべきであるという宗教的理由が必要です。そしてさらにローマに訴えて、この人を死刑にするように説得するための理由も必要です。その目的に向かって祭司長たちと最高法院全体はイエスに不利な「偽証」を得ようとしたと59節にあります。この「得ようとした」という言葉は原文のギリシャ語では未完了過去という時制で記されていて、継続的になされた行為を現します。つまり彼らはイエスを死刑にするための証言を求めたが、なかなか見つからなかったということです。求めても求めても見当たらない。60節に「多くの偽証人が出て来たが、証拠は得られなかった」とある通りです。思いのほか、ここで手間取ったわけです。しかし最後に2人の者が進み出て、こう言いました。61節：「この人は、『わた

しは神の神殿を壊して、それを三日で建て直すことができる』と言いました。」これはなかなか都合がいい訴えでした。神殿を壊すという主張は冒瀆的思想であると断罪することができます。その上、ローマに訴えることも可能です。この人は平和を脅かす危険人物であると。しかしイエス様は本当にこのようなことを言ったのでしょうか。

これと関係するのはヨハネの福音書2章19節のイエス様の言葉でした。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」これは2節後に「ご自分のからだという神殿について語られたのであった」と記されていますように、イエス様の死と3日後の復活を指す言葉でした。しかしある人はこれを聞いて、イエスは神殿を壊すと言ったと記憶していたのでしょうか。そしてこれと関連があるようなこともマタイの福音書には記されていました。イエス様は12章6節でご自分を指して「あなたがたに言いますが、ここに宮よりも大いなるものがあります」と言われました。これも取りようによっては、宮を軽視し、宮を廃棄しようとする言葉として聞こえます。また21章12～13節でイエス様はいわゆる宮きよめをされました。宮の中で売り買いしている人たちを追い出し、両替人の台や鳩を売る者たちの腰掛けを倒されました。これも神殿と神殿にまつわるシステムを破壊する動きと取れなくありません。また24章2節でエルサレム神殿を指して「どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません」とエルサレム神殿崩壊について予告されました。イエス様を訴えようとする者たちはこれらを都合よく解釈したのでしょうか。これを受けて大祭司は立ち上がり、イエス様に言います。なぜ何も答えないのか。この人たちがおまえに不利な証言をしているのに！と。

これに対してイエス様は「黙っておられた」と63節にあります。これはどういうことでしょうか。イエス様には答える気力もなかったのでしょうか。あるいは人々の仕打ちに怒り、沈黙をもって抵抗していたのでしょうか。そうではありませんでした。普通、不利な証言がなされたら私たちは黙っていないと思います。黙っていたら益々不利な立場に追い込まれるだけです。ですから急いで口を開き、今の訴えは違う！と反論します。ところがイエス様はそうしなかった。なぜでしょう。イザヤ書53章7節：「彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」イエス様がこのように黙っていたのは、ご自分を救い出そうとしなかったからです。逆にそのようにして私たちの身代わりを果たそうとされたからです。もしここでイエス様が訴えの不当性を糾弾して

ご自分を救い出したら、私たちに救うことはできなくなります。ですからイエス様はそうされなかったのです。むしろ私たちに代わって責めの言葉、非難の言葉を受けられたのです。そして身代わりを果たすことへと進んでくださったのです。

さて大祭司はさらにイエス様に問います。何かしゃべらせて、断罪するための決定的な口実をつかまなくてはなりません。そこで命じます。「私は生ける神によっておまえに命じる。おまえは神の子キリストなのか、答えよ。」 一見、何の脈絡もない唐突な問いのように聞こえるかもしれませんが、そうではなかったようです。先にイエス様が神殿を壊すと言ったという訴えが取り上げられましたが、やがてメシヤが現れる時には今ある神殿が壊され、新しい神殿に置き換えられるという考えがゼカリヤ書 6 章 12 節などに基づいて当時の人々の間にはありました。そこで大祭司は問うたのです。ではお前は自分がメシヤすなわちキリストだと主張するのかと。そして彼はさらに「神の子」という言葉も加えました。これも特別なことではなく、当時の人々の間では「キリスト」と「神の子」は同義語のようにして使われていたようです。たとえば第二サムエル記 7 章 14 節のいわゆるダビデ契約において、神は将来ダビデから出る真の王なるメシヤについて「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」と言っておられました。そのようにメシヤは神から「わたしの子」と呼ばれる存在、そういう意味で神の子であるという理解がありました。そこで大祭司としてはごく自然に「おまえはキリスト、つまり神の子なのか、答えよ」と問うたわけです。

これに対してイエス様は 64 節でこう答えました。「あなたが言ったとおりです。」 これは原文を直訳すると「あなたが言いました」という表現になっています。大祭司が「どうなのか」と聞いているのに、イエス様は「あなたが言いました」と答えたわけです。ちょっと面白いやり取りのように思えます。ここにはどういうニュアンスがあったのでしょうか。少なくとも分かることはイエス様はここでご自分が神の子キリストであることを否定してはいないということです。しかしだからと言ってカヤパの言葉に素直に同意してもいません。なぜこういう言い方をしたかと言えば、それはカヤパが「神の子キリスト」という言葉で考えていたことと、イエス様がこの言葉で考えていることの間には相当な開きがあったからです。ですからイエス様は、それはあなたの言葉だと突き放した言い方をしたのです。そしてその言葉をわたしは否定はしないが、「しかし、わたしはあなたがたに言います」と言って、この言葉で考えるべきことについて教えようとされたのです。では両者の考えはどのように違っていたのでしょうか。大祭司を含めて

当時の人々の一般的なメシヤ理解は一言で言えば地上的メシヤ、あるいは政治的メシヤと呼ばれるものでした。ローマの支配からユダヤ人を救い出し、全世界の上に高く上げてくれるメシヤ。かつてのダビデのように先頭に立って国々と戦ってこれを征服し、圧倒する武力的メシヤ。しかしイエス様はそれを退けておられます。そして 64 節で特に旧約聖書の二つの聖句に基づいて語っておられます。一つ目の人の子が「力ある方の右の座に着き」という言葉は詩篇 110 篇 1 節をもとにしたものです。「力ある方」は「神」のこと。その方の右の座は、より誉れある場所のことであり、至高の座のことです。つまりイエス様は神の次に位置する座にご自身は着くと言われたわけです。もう一つの人の子が「天の雲とともに来るのを見る」は、ダニエル書 7 章 13～14 節をもとにした言葉です。「見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。・・・この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」

ある人はここで次のような疑問を持つかもしれません。キリストは黙って何も話さない方針ではなかったのか。なのになぜここで口を開いているのかと。しかし先ほど述べたことは、ご自分を救い出すためには口を開かないということでした。私たちの身代わりを果たすため、ご自分を救い出すことはしない。しかしここは信仰に関わる重要な場面です。ご自身はどんな存在であるのか、証しするための機会です。そこでは口をつぐんでいくべきではない。イエス様は神の子キリストですが大祭司たちが考えているような方ではない。彼らはメシヤを神がイスラエルを救うために立てた人間的な器としてだけ考えていました。しかしイエス様はご自身はそれ以上の方であることをここで明言されたのです。これを語ることはある意味でご自身の身を危険にさらすことです。一層攻撃されやすくなります。しかしイエス様はいつの時代の者たちもはっきりとイエス様はどなたであるかを知り、信じることができるために、勇敢にこのことを証しされたのです。

さてこの言葉を聞いた大祭司は、これを信じられない冒瀆として受け取りました。皆の者よ、聞いたか？この人は今、自分を神に等しい存在であるかのように語った。神にのみふさわしい特権を自分のものと主張し、侵害した。これ以上、誰かの証言など必要だろうか！と。するとそこにいた人たちも「彼は死に値する」と答えます。もちろんイエス様が本当に神なら、これは少しも冒瀆的発言ではありませんが、そんなはずはないという前提に立っている彼らにとって冒瀆的発言以外の何物でもない。そこでこの人は死

刑に値するとの判決を下したのです。

そしてイエス様への虐待が始まります。67～68 節にある通り、彼らはイエス様の顔に唾をかけ、拳で殴り、またある者たちはイエス様を平手で打つことをしました。私たちは自分がこのようにされたらどう感じるかを考えてみるべきだと思います。顔に唾を吐きかけられるような扱いをされただけでどんな思いになるか……。しかし私たちの主はこれを耐え忍ばれました。神の子なる方、神ご自身である方が、このような扱いを甘んじて受けられたのです。祭司長たちは、このイエスがもし神的存在なら、このようなことをされても自分を救い出せるはずだと考えていました。それができないということは、自分で主張している通りの者ではないことを証明しているとしました。最後の 68 節の「当ててみろ、キリスト」という言葉には印がついていて、欄外の 68 に直訳では「預言せよ」であることが注釈されています。キリストなら預言できるはずである、つまり誰がそうしたかを言い当てることができるはずである。しかしそれができないのは、そうではないことの証明である！と彼らは蔑んだのです。しかしこれまで見て来ましたように、イエス様はそれができない人だったから、なすがままにされていたのではありません。神の子ではないから自分を救えなかったのではないのです。イエス様はご自分を救えなかったのではなく、救わなかったのです。イエス様はご自分に対して不当な証言がなされた時、黙って耐えてくださったばかりでなく、このひどい仕打ちを受けた時も口を開かず、それを受けてくださったのです。そしてこの後、十字架へと引き立てられて行くのです。

ですから私たちは今日の箇所を単に祭司長たちがひどいことをイエス様にした記事として読んで、それで終わりとしてはなりません。イエス様は何とかわいそうな立場に置かれたかと思って終わりとしてはなりません。なぜイエス様はこのような仕打ちを受けられたのか。それは誰のせいなのでしょう。誰が悪いのでしょうか。イエス様がこのようにされたことの責任を問うなら、まず私たちは自分の罪を思うべきです。イエス様はこのような仕打ちを何よりも私たちのために甘んじて受けてくださいました。やがて天の雲に乗って栄光の内に現れる方がご自分を無にして、言葉に絶するこのような虐待をも一つ一つ耐え忍んでくださいました。私たちはこれをイエス様が私たちの救いのためにしてくださったこととして見て、イエス様の前にひれ伏し、またイエス様に謝りたいのです。私の身代わりを果たすための犠牲であったことを見て、この方の前に額づいて心からの感謝の礼拝をささげたいのです。

そしてこの方がやがて栄光の内に天の雲に乗って来られる日を待ち望む生活へ導か  
れたいと思います。私たちがその日を恐れることなく、むしろ楽しみに待つことができ  
る根拠は何でしょうか。それは私たちの罪はこの方の身代わりにおいてさばかれたとい  
うことです。イエス様が私たちの代わりに私たちが受けるべき苦しみと死をすべて受け  
てくださり、処理してくださったことです。ですから I テサロニケ 5 章 9 節では、主の  
再臨の日を指してこう言われています。「神は、私たちが御怒りを受けるようにではな  
く、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」 主は  
今すでに、父なる神の右の座でこの世界をすべて治めておられます。そしてやがての日  
に私たちを救うために再び来られて、ご自身の主権と栄誉に満ちた永遠の御国に導き入  
れてくださいます。その日をいつも見上げて待ち望む希望の生活を導かれないと思いま  
す。そして主が払ってくださった尊い犠牲に信頼して、やがての日には喜びをもって栄  
光の御国に入る者とされる歩みを導かれないと思います。